本棚ぶらり

千年のベストセラー『源氏物語』

11月1日は「古典の日」です。「古典の日」のロゴマークには、『源氏物語』を連想させる王朝時代の美男美女があしらわれています。それもそのはず、もともとは源氏物語千年紀を記念した日です。今号では『源氏物語』ゆかりの本をご紹介します。

『源氏物語』の原典は長大で読みとおすのに気後れしてしまうかもしれません。まずは手軽な現代語訳をどうぞ。

『紫の結び　源氏物語』１～３（荻原規子／訳　理論社 2013～2014）は、原典五十四帖のうち、主人公光源氏と、関わりの深い藤壺の宮や紫の上、明石の君といった女君たちにまつわる二十五帖をまとめたものです。「少しでも楽に『源氏物語』を読み進めてほしい」と考えた訳者は、物語の骨格である愛と苦悩に満ちた光源氏の生涯を抜き出しました。

「どの天子さんの御代のことでしたやろか」ではじまる『現代京ことば訳源氏物語』１～３（中井和子／訳　大修館書店　1991）は、源氏物語の全文を京ことばに訳したものです。『源氏物語』の登場人物が京ことばで話すのは自然な感じがして、京という土地と物語のつながりを感じることができます。

このようにいろいろな現代語訳があるのも『源氏物語』が千年以上愛されてきた証拠です。作者はどのような人だったのでしょう。

『私が源氏物語を書いたわけ　紫式部ひとり語り』（山本淳子／著 角川学芸出版　2011）は『源氏物語』の作者・紫式部が書いた回顧録『紫式部日記』と歌集『紫式部集』をもとに、その他の史料や研究成果を加えた伝記です。

この本を読むと、紫式部自身の心が『源氏物語』にとらわれていたことが分かります。

紫式部は女房（侍女）として一条天皇の中宮であった彰子に仕えました。初出仕のとき『源氏物語』の作者なのだから彰子はじめ一緒に働く女房たちに暖かく迎えられるのではと期待したり、一条天皇の辞世の歌は光源氏が作中で詠んだ歌と関係があるのではないかと考えたりしています。

秋の夜長に『源氏物語』の世界を味わってみてはいかがでしょう？

大人も楽しめる 絵本の世界 第8回

『三びきのやぎのがらがらどん』

北欧民話
マーシャ・ブラウン／絵　　瀬田貞二／訳
福音館書店（1965）

さいたま市ゆかりの絵本作家といえば、なんといっても数々の名訳作品を残した石井桃子と瀬田貞二だろう。

今回紹介するのは、瀬田の名訳が光る『三びきのやぎのがらがらどん』だ。

余分な形容詞を省き、独特なリズムで進んでいく昔話の構造を熟知した話の流れには、読む者、聞く者をグイグイと引き込んでいく圧倒的な力がある。

また、ノルウェーの豊かな青い空の色を基調としたマーシャ・ブラウンの絵は、一見荒々しい印象だが、少し離れてみると、その美しさにハッとさせられる。やぎたちが橋を渡る場面では、その大きさに合わせ「かたこと、かたこと」「がたごと、がたごと」「がたん、ごとん、がたん、ごとん」と擬音が変化する。同時に絵では、やぎの重さで吊り橋が弛んでいく様子が俯瞰の視点でしっかり描写され、文字と絵が相互を助ける、巧みな演出となっている。

またこの作品には、「火かき棒」「田楽ざし」といった古臭い言葉も出てくる。しかし、それを質問してくる子どもがまずいないのは、圧倒的なお話のリズムと流れに身を任せ、聞き終わったときの満足感・幸福感を自ら壊したくない気分にさせるからだろう。

絵本にとって重要なのは見た目が良いといった表層的な事ではなく、子どもの視点に立ち、真摯に取り組んだ作品であるかということだ。まさにお手本ともいえるこの作品は、今後も廃れることなく読み継がれていくことだろう。